

フィリピン・マニラを拠点にしながら、これまで活動をしてきた。しかしながら、たまたま、この時期に居合わせなかったこともあり、イエス・キリストの受難と死、そして復活までを記念するこの行事がこれほどまでに盛大で、また、この地の人の心の支えとなっていることは知らなかった。

キリスト教徒でなくても、イエスの誕生、その後の数々のエピソードに溢れる生い立ち、そして最後の晩餐を経て十字架での磔(はりつけ)で非業の死を迎える話は、誰でも知っているであろう。

この死をもって、人の罪を全て償いまた、死後の復活で再び我々の心のなかに蘇り、慈愛のなかに人を導く。

この後半の話が、キリストの復活を記念して行われる行事の由縁でもある。復活の日は、この時期の日曜日と(ユダヤ暦計算で)定められ「Easter Sunday」と呼ばれる。いわゆる「イースター」である。

これらの行事のなかでも、「その死を示唆する最後の晩餐の日(木曜日)」、「十字架はりつけでの非業の死を遂げる日(金曜日)」、「追悼の日(土曜日)」、そして「復活の日(日曜日)」の4日間は、特に重要であり、フィリピンでは「聖週間(Holy Week)」と、称する国民一斉の連休・祭日である。この休日が半端ではない。

殆どの店、レストランがクローズとなり、通りは、人影が途絶える。

あれほど町に溢れていた人々はどこにいったのか。

しかし、マニラの下町にはしっかりその人々のエネルギーがあった。この写真である。

金曜日の夜、キリストの受難と死をイメージした人形が、みこしのうえに飾られ、町を練り歩いているではないか。

ブラスバンド隊を先頭に、その数も20組以上の大パレードである。

聞けば、この地区のバランガイ(自治会組織)の催しとこのこと。揃いのTシャツの若い衆の担ぐみこしは、このバランガイの教会を目指し、通りの隅々まで練り歩く。キリストの苦しみをしのんでか、みな裸足でもある。これに沿道の人々も、キャンドルを点して応える。

さすがに爆竹と鐘の雰囲気ではないが、長崎の精霊流しを彷彿させるものがある。

実は、この日の午前、マニラ首都圏でも一番大きいカトリック教会(Baclaran 教会)を訪れてみた。堂内には祈りを捧げる溢れんばかりの人々。そして、受難のその時刻(午後3時)、この場所でのミサを待っている人々。

ひたすら祈りの中にあるこの地の人々をみることができた。

この日、フィリピンの人々の生活と息づかいを垣間見ることができた貴重な一日でもあった。

